第二章　樹の観察

一．妖精の里（１）

「コンコンコン。エルドル。コンコンコン。エルドル。コンコンコン。エルドル」

なんでいつも三回ずつノックするの、エリン？

「この世界にはね、あなたの知らない理論が存在するの、エルドル」

エリンが何を言っているのかよくわからないよ。

「五十の星の加護を受ける場所で……うーん、まだあなたには難しいから、あとで説明してあげるね」

やっぱりエリンは何でも知ってるんだね？　そんな理論まで。エリンは僕自身も知らなかった僕の名前だって知ってたし。本当は全部知ってるんでしょ？

「違うって言ってるのに。この子は冗談も通じないんだから」「あのね、はっきりさせておくけど。私だって何でも知ってるわけじゃないの。知らないことだらけだよ。ただ、どこかで教わったことを知ってるだけ」

教わった？　エリンも僕みたいに何も知らないときがあったの？

「小さい頃はそうだったよ。スズメが大きくなったらハトになるんだと思ってたし。うん、とにかく教わって知った……」

――コン

あれ？　今なにか音がしなかった？「何の音、エルドル？　何か聞こえたの？」

――コンコン

あのコンコンいう音だよ。エリンには聞こえないの？「私には何も聞こえないけど？　それよりさ。前にも言ったけど、あなたって……」

――コンコン　――コンコンコン！

「ああ、うるさい！　エリンが何て言ってるか全然聞こえないじゃないか！」

ひっきりなしに響くコンコンという音に苛立ちを爆発させて、目を開けた。正確に言えば、意識が覚醒した。青い空がまぶしかった。そしてエリンはどこにもいなかった。 ついさっきまでエリンとおしゃべりしていたのに？ 何が起きたのか理解するのに少し時間がかかった。久しぶりに頭を働かせたせいだろう。わずかなもたつきを経て、ようやく自分が眠っていて今しがた目覚めたのだと気づい

た。

――コンコンコン！

そして僕を眠りから覚ました音は、依然として幹の根元あたりから聞こえていた。その辺りがなんだかくすぐったくもあって確かめてみると、人間に似た妖精たちがわんさと集まっていた。 そういえば眠りにつく前、しきりに妖精を作っていたのだった。けれどあんなに大勢は作っていないはずだ。

「や、やめて！　記念樹をこんなむやみに開発したら、だ、だめだってば！」 「いいの！　こんな大きな木を開発すれば、どれだけ多くの住居問題を解決できるかわかってるの？」 「だ、だめだってば……記念樹を傷つけたら大変なことになるかもしれないよ。え、えーっと何だっけ……そう、緑地整備がちゃんとしてないと街の見栄えが悪くなるんだよ」

記念樹って何？　住居って何のこと？ 妖精たちは二手に分かれて言い争っていた。一方は斧を持って僕に近づこうとし、もう一方はそれを止めようとしていた。 とりあえず気になるから、このちんまい連中が何を言っているのかもう少し聞いてみよう。

「緑地整備の前に、まず住む家を確保しないと。妖精が生きてこそ美しさも感じられるってもんでしょ」 「で、でもこの記念樹がどれだけ長い間ここにあると思ってるの。それに下手にいじったら、これから生まれてくる子たちに悪い影響が出たらどうするの？」

話が噛み合わないのか、斧を持った側がなりふり構わず押し入ってきた。止めようとする妖精はいっそ大の字に寝そべって道をふさいだ。

「話してもわかんないみたいね！　この子たちは無視して、まず記念樹を伐るわよ！」 「だ、だめ！　記念樹を開発するっていうなら、私を踏み越えてからにしなさい！」

だいたいわかった。つまり「記念樹」というのは僕のことらしい。僕の前であんなに騒いでいたのは、僕を開発しようとしていたからか。ん？　僕を開発する？ 押し入る妖精たちは文字どおり、阻む妖精たちを踏みつけて通り過ぎた。そしてそれぞれ手にしたお粗末な斧を僕めがけて振り下ろした。

――バキッ！ 【うわあっ！　■■！！！】

かつてエリンが発した、あの物騒な調子の悲鳴が飛び出した。

な、何これ？　なんでこんなに痛いの？

「な、何？　今の聞こえた？」 「ねえ、あんたも？　私だけじゃないよね？」

まったく痛くないと思っていたのに、ものすごく痛い。口のない樹の身でありながら、悲鳴が勝手に出るほどの痛みだった。 妖精たちは僕の悲鳴にぎょっとして、斧を取り落としたり体をがたがた震わせたりした。 盛大な悲鳴を数十秒にわたって発射した僕は、痛みが少し引くと頭のてっぺんまで怒りがこみ上げてきた。

【いったい何をしたんだ！】

僕の声に合わせて地面から木の蔓が突き上がった。蔓はあっという間に妖精の持っていた斧をもぎ

取って叩きつけた。そこまではカッとなってやったのだが、そのまま妖精たちまで捕まえるのはやりすぎだと思ってやめた。 けれど怯えた妖精たちは一瞬で僕の前から姿を消した。僕は妖精を探して周囲を見回し、そこでようやく森の様子をまともに見ることができた。 もともと何もなかった広場に、数百軒の家が建ち並んでいた。僕とエリンが作った丸太小屋よりずっと小綺麗で整然としている。 さっき僕の前にも大勢の妖精が集まっていたが、それ以上の数がこの場所に暮らしているらしい。

【隠れていないで出てきなさい】

僕は蔓を引っ込めながら言った。ちゃんと隠れきれず、扉や窓の隙間から手足がはみ出しているのを見たら、怒る気力が失せた。 すると妖精たちはひそひそ相談し合ったかと思うと、一匹を足で蹴り出して家の外に追い出した。一番華やかな服を着た妖精だった。

「も、申し訳ございません……」

妖精は地面に平伏して、がたがた震えていた。泣きそうにまでなっているところを見ると、よほど怖がっているようだが、僕はそんなに恐ろしかっただろうか。 よく見ると、妖精は頭に立派な冠を載せていた。服装も一番華やかで装飾品も多いところを見ると、妖精たちの代表者のようだ。

【どうやって僕に傷をつけられたんだ？】 「そ、その……ただの他の木より大きいだけだと思って……も、申し訳……」 【僕が聞いているのは、どうやっておまえたちが僕に痛みを与えられたのか、ということだ】 「は？　それは……その……」

この森には絶対的な法則がひとつ存在する。何ものも決して僕を害することはできない。僕の被造物である以上、僕に苦痛を与えることはできないはずなのだ。 それなのにこいつらは僕を痛めつけた。コンコンという騒音程度しか生まなかったはずの連中が、突然、大きな痛みをもたらしたのだ。

【言いなさい】 「もとはただの木みたいに切って中をくり抜くつもりで……ひっ！　も、申し訳ございません！」 【……怒らないから続けて】 「は、はい……そ、それで斧で打ってみたんですが……刃がまったく通らなくて……魔法を塗った斧で打ちました……」

魔法を塗るってどういうこと？　そもそも妖精に魔法を教えた覚えはないのに。

【どうやって魔法を塗ったんだ？】 「ふだんは斧が重いので軽量化の魔法をかける程度なんですが。記念樹……さまを切ろうとして、ありとあらゆる魔法を詰め込みました」

ようやく恐怖が薄れたのか、妖精は震えずに話した。それはいいのだが、言っている内容は相変わらず理解しがたかった。僕の質問に対するまともな答えにもなっていない。

【僕は「どうやって」と聞いたんだ。「なぜ」ではなく】 「あ、あ……それは、物に魔法を上書きする方法を使いました。私たちは生命のない物体に魔法を固定できるんです」

ふとコンロや精霊の子たちのことが頭をよぎった。あの子たちは無生物ではなかったけれど、魔法が付与された原理は似ていた。

【魔法は誰が教えた？】 「あの向こうの――西の山に住む精霊たちが基礎的なことを教えてくれました。それを私たちが研究・改良して今のようにしたんです」

やっぱり精霊か。エリンを助けるために作った子たちだが、まだ残っているのか。まあ、僕が眠りにつく前にこの森から死を完全に取り除いたのだから、死んではいないだろう。 じゃあ、あの子たちが妖精を助けたわけだ。口は悪くても、エリンに似て優しい子たちだったから。

【わかった。ところで、なぜ僕を「記念樹」と呼ぶんだ？　おまえたちは僕の名前を知らないのか？　僕が誰かもわかっていないのか？】 「あ、あの、それは……」 【知らないということだな？】 「は、はい……存じません」 【どうして知らないことがあるんだ？　この森を作ったのは僕だぞ！】 「ひいいっ！　も、申し訳ございません！　お、お助け、お助けください！　ごめんなさああい！！！」

わからなくて大きな声を出しただけなのに、怒っていると誤解したらしい。妖精はさっきよりもっと怯えて、額を地面にめり込ませる勢いで震えた。あれ？　この子、泣いてる。 泣いているからといって、なだめてやろうという気にはあまりならなかった。それよりも、妖精が言ったことを整理してみた。 妖精たちは僕の存在を知らず、僕を伐ろうとしていた。 精霊が妖精に魔法を教えた。 どうやったのかわからないが、妖精は数を増やし、洗練された家や華やかな服まで作り上げた。 面白いな。この子たち、本当に僕が眠っている間に自力でここまで発展したっていうのか？ その瞬間、僕が抱いた感情は「誇らしい」と表現してもまったく足りないほどだった。

【もう一度聞くよ。僕の名前はエルドルだ。本当に聞いたことがない？】

「申し訳ございません、記念樹さま！　もう絶対に伐ろうとしません！　周りで騒ぎません！　無駄にでかいだけの木だなんて悪口も言いません！　申し訳ございません！」

最後のはちょっとムカッとくるんだけど？ でも、僕の質問にまともに答えられないほど震えている妖精を見ていたら、こみ上げていた怒りがまた引いていった。むしろ少し可哀想になった。最初から僕の質問をちゃんと理解できないくらい緊張している子なのだ。 僕が乱暴に言いすぎたのかな。とにかく落ち着かせる必要がありそうだ。うーん。エリンと出会ったときのように実体化すれば、多少は怖がらなくなるかな。そうしよう。 僕は体を実体化させた。妖精の外見は人間に似ていたから、見た目は以前のままだ。 ただし服装は、妖精たちが今着ているものに似せて再現した。自分たちなりにあんな様式を作り上げたというのが面白くもあり、けなげでもある。 それなりに満足のいく姿に実体化できた。僕はまだがたがた震えている妖精の頭に手を置いて、できるだけ穏やかな声で言った。

「僕が追い詰めすぎたみたいだね。そんなに怖がらなくていいから、もう顔を上げなさい」 「え、えっ？」

額と地面の接触面積がどこまで広がるか試すように額を押しつけていた妖精が、顔を上げた。そして大きな目をさらに大きく見開いて、僕を見上げた。 まあ驚くのも当然だよね。威厳に満ちた巨大な樹が突然、自分たちと同じような姿で現れたんだから。もちろん僕は広い心で子どもたちの驚きを受け止めてあげる……

「ちょっと。あんた誰よ。生意気に女王さまの頭に触るなんて」

ことができなかった。 おまえの創造主なんですが？

一．妖精の里（２）

女王を自称する妖精と他の妖精たちに、僕が記念樹と同一の存在であることを理解させるのに長い時間はかからなかった。気づくまで正座で手を上げさせたら、一日と経たずにみんな僕の名前を叫んだ。姿勢が崩れたら即座に蔓を伸ばして逆さ吊りにしてやると、いっそう効果てきめんだった。

妖精たちは僕が彼らを創った存在であるという事実を、ほどなく受け入れるしかなかった。「記念樹」と呼ぶのもやめさせたが、名前を直接呼ぶのは恐れ多いと言って、代わりに「世界樹さま」と呼んだ。

そうした些細なことが片づいてから、僕は妖精たちが築き上げた文化をじっくり探っていった。冠をかぶった女王妖精が僕の専属ガイドになった。

「私の名前は『アセリン』です」 「何だって？　名前？」 「ア。セ。リ。ン。です」

僕が聞き返したのを聞き間違えたのか、アセリンが一音ずつはっきり発音した。名前を聞き取れなかったんじゃなくて、名前があること自体が不思議で聞き返したんだけど。 でもこれも驚きだな。僕はエリンに名前をつけてもらうまで何も知らずに生きていたのに、この子たちは自分で名前を作ってつけたんだ。こんな文明まで築き上げて。

「どうして名前をつけようと思ったの？」 「名前がないと、お互い呼ぶとき困るんですよね」 「名前はどうやってつけるの？　誰かがつけてくれるの？　何かルールみたいなものがある？」 「えーっと、どうでしょう？　私はふと頭の中に自分の名前が浮かんだんです。たぶん他の子たちもそうだと思いますけど」 「ふと浮かぶ？」 「はい！　うーん、新しい妖精が現れるときみたいな感じで！」

うっかりしていたけれど、妖精の数は僕が眠っている間にものすごく増えていた。しかし僕は妖精にそんな能力を与えた覚えがなかった。 エリンは家族について説明するとき、人間には男性と女性がいると言っていた。ただ、僕にとって人間はエリンしかいなかったので、男性という概念をうまく捉えられなかった。そのため、僕が作った生命体はすべてエリンをモデルにした女性だった。

「じゃあ新しい妖精は誰が作るの？　どうやって生まれるの？」 「え？　あ、それは当然……」

アセリンはすぐには答えず、僕をじっと見つめた。何か僕と関係があるのだろうか。

「いいから言ってごらん」 「私は記念樹……世界樹さまがお作りになっているのだとばかり」 「何？」 「新しい妖精は世界樹さまの周りの花から生まれるんです。だから私はてっきり世界樹さまが……」

最後まで言わずに、また僕を見るアセリン。視線が痛い。 アセリンがさらに説明してくれたところによると、僕の本体の枝に実がなり、それが落ちるとその場所に見たこともない花が咲き、その中から新しい妖精が生まれるのだという。 知らないよ。何これ、怖いんだけど。

「僕が……眠っている間に生み出していた、ということか？」

ふと、眠っている間に見ていた夢が思い出された。すべてエリンが出てくる夢だった。僕が夢の中でエリンを見ている間に、その影響が外に現れたのだろうか。事実かどうかにかかわらず、かなり戸惑

う。僕がつぶやいた言葉を聞いたのか、アセリンが疑わしげな目を向けてきた。

「世界樹さまが私たちをお作りになったんじゃないんですか？　なぜそんなに慌ててらっしゃるんです？」「あ、いや、ん？　ち、ちょっと別のことを考えていただけだよ。もちろんおまえたちは僕が作ったんだ！　うん、当然だとも！」

そうだ。僕でなければ誰が作るというのか。僕が作ったのは厳然たる事実だ。問題があるとすれば、僕自身がそれを覚えていないということだけ。 アセリンはいくぶん怪訝そうだったが、僕が言い切るとすぐに流してくれた。

僕は話題を変えてあれこれ質問し、アセリンは自分の知る限り精一杯答えてくれた。 妖精は僕とよく似ていた。やはり僕から生まれたからだろうか。魔法が得意だというが、魔法を教えた精霊よりもずっと上手に使いこなすらしい。精霊がただ火を起こせるだけだったのに対し、妖精は火をさまざまな温度や形に変えて、各種便利な魔法を生み出していた。

そしてエリンの性質も受け継いでいた。 人間のように家や服を必要とし、食事もしなければならなかった。食べなくても死にはしないが、お腹がいっぱいでないと魔法が使えないのだという。 眠ることもそうだし、人間のようにエネルギーを補給する手段が妖精には必要だった。そんなあれこれの話を聞きながらアセリンと一緒に村を歩き回った。するとほかの妖精たちが珍しそうにひとり、またひとりとついてきて、しまいには村中の妖精が集まってきた。

そうして群がった妖精たちは、自分たちの作った服や食べ物を自慢するように僕にすすめてきた。ううっ。いくら僕のことが好きで寄ってきたとはいえ、さすがにちょっと重い。 そのとき、ごったがえす妖精の群れの中からぱっと飛び出してきた地味な身なりの妖精がひとり、僕の前にひざまずいた。

「エルドルさま！　どうか私をあなたの僕として召し抱えてくださいませ！」「ん？　僕？」

召使いということか？　でもいきなり何の話？ アセリンはその妖精を見てうろたえ、何やら気まずそうにこっそり言った。

「あの子は気にしないでください、世界樹さま。前からちょっと行き過ぎた振る舞いをする子がひとりいまして」「どういうこと？」「あの子、やたらと何にでも意味をこじつけて変な行動をするんですよ。毎日世界樹さまの周りをうろうろしながら変なことをぶつぶつ唱えて……」

アセリンの話を聞いていると、地味な身なりの妖精が悔しそうに口を挟んだ。

「当たり前でしょ！　どう見たって記念樹さまはただの木じゃないじゃない！？　大きさからして普通じゃないのよ！　記念樹さまをただの木扱いしてるあなたたちのほうがおかしいんだってば！」

また記念樹か。蔓でぶら下げてやろうか迷ったが、一応、僕は偉大な存在だと叫んでくれている子にそれは申し訳ないのでやめておいた。 代わりにこの子に興味が湧いて聞いてみた。

「僕が特別な木だと思ったのは、きみだけ？」「わ、私に直々にお言葉をくださるなんて！　私と志を同じくする妖精は他にもおります、エルドルさま！」「へえ、そう？　それじゃあ、きみたちは僕の周りを回りながら何をしていたの？」「記念樹さまの周りの雑草を抜き、水をやり、毎朝毎夕、樹さまを讃えておりました」「讃える？　えっと……僕を讃えた？」「記念樹さまは私たちを生まれさ

せてくださり、腹いっぱい食べられる豊かな糧と家を建てる広大な土地を与えてくださり、朝に私たちを起こす太陽と夜に私たちを寝かせる月を作ってくださいましたゆえ、当然の讃美を捧げたのでございます！」

一瞬、意識が遠のいた。嬉しいという域を超えて、重圧感がどっと押し寄せた。人間を作ろうとして失敗し、そのまま放っておいた子が僕をこんなふうに崇めるとは。これは何かがおかしい。

「やめなさい、メイル。世界樹さまが驚いてらっしゃるでしょ。それに世界樹さまが記念樹って呼ぶなっておっしゃったの、忘れたの？」 「し、失礼いたしました。樹、世界樹さま！　あなたの卑しき僕の過ちを、どうかお赦しくださいませ！」

僕が怒ったときのアセリンと同じように、地味な服の妖精が額を地面にめり込ませんばかりに頭を下げた。その姿にアセリンが深くため息をついて言った。

「ほら、世界樹さま。たしかにちょっと変でしょう？」 「ん？　まあ……とりあえず、きみは早く立ちなさい。記念樹と呼んだことは許すから」

僕が手招きすると、地味な身なりの妖精が感激した顔で頭を上げた。目がきらきら輝いていて、見つめ返すのが気恥ずかしいほどだった。

「世界樹さまの慈悲深いご恩寵に感謝いたします！　この卑しき僕は、エルドルさまがお目覚めになることを夢にまで願っておりました！　それなのにこうして直々にお姿をお見せくださり、卑しき僕の信仰をお認めくださるとは、身の置きどころがございません！」 「うん、それで？　えっと……名前は？」 「おお！　取るに足らぬ私の名さえお尋ねくださるとは！　あなたに従う卑しき僕、メイルにございます、エルドルさま！」 「そうか、メイル。少し落ち着いて聞いてくれ。僕はね、ただ眠っていて……」 「エルドルさまがお言葉を発された！　卑しく愚かな者どものために、我らが創造主たる世界樹さまがお語りになるゆえ、皆、耳を洗って傾聴せよ！　エルドルさま！　どうか不肖の僕どものために深きお言葉を賜り、私たちを正しき道へお導きくださいませ！」

この子、何？　ちょっと怖いんだけど？ とても言葉で解決できる状況ではない。メイルは僕の言葉を待っているくせに、自分の言いたいことだけ全部言い切った。このメイルの信仰心は、正直ぞっとするものがあった。 どうすればこの厄介な子をやり過ごせるだろう。

「あ、そうだ！　こうしよう」 「仰せくださいませ、エルドルさま！　あなたの忠実なる僕は、いつなりともお言葉を受ける用意がございます！　みな跪いて世界樹さまのお言葉を拝聴せよ！」

メイルが声を張り上げると、実際に数匹の妖精たちがひざまずいた。ひざまずかない妖精も、周囲に集まった全員が僕に注目していた。 なぜ状況が悪化しているんだ。崇められるのは悪くないけど、これはやりすぎだろう。

「おまえたちが無理に僕の周りを世話する必要はない。たとえおまえたちがいなくとも、僕はいつだってこの姿のままだから」

最初の一言で、メイルが目に見えてしょんぼりした。少し重くはあっても、僕を慕ってくれる子がああなると気がかりで、言葉を付け足した。

「もちろん、やりたいというなら止めるつもりもない。自らそう望むなら好きにしなさい。ただ、こんなことで互いに争わないでほしい。眠っているときに騒がしい音で起こされたくはないからね」

するとメイルの顔がぱっと明るくなった。この子は本当に僕を信仰と憧れの対象として見ているようだ。

「そのようにいたします、エルドルさま！　それでは、あなたの卑しき僕がどのようにあなたをお仕えすべきか、お教えくださいませ！　あなたが望まれることをお示しくだされば、この身が喜んで従います！」

そんなものはないのだが。今言ったことが望みの全部なのだが。これ以上何を言えばこの子が満足するのかわからない。 僕は妖精たちにもっと有意義なことをしてほしかった。無駄なことに力を注がせたくなかった。言ったとおり僕に世話は必要ないのだから。僕に何をされても僕は問題な……くもないな。魔法を塗った斧は痛かったし。

「では言おう。まず、僕のそばから斧をなくしてほしい。そう、それがいい。あと、僕のそばに一生居座って時間を無駄にせず、おまえたち自身の人生を生きなさい。そうして疲れて休みたくなったら、いつでも僕の根元に来てひと眠りすればいい」

なかなかうまく自分の考えを表せた気がする。僕が話し終えると、辺りはさっきよりもっと静まり返った。

「それで終わりでございますか？」「終わりだけど？」

するとメイルがさっと立ち上がり、妖精たちに向かって両腕を大きく広げた。

「聞け！　エルドルさまがお言葉を発された！　斧を廃せよ！　万事に力を尽くせ！　眠りをもって祈れ！　これがエルドルさまのご神託にして、神言である！　すべての者、誠心をもってこの言葉に従え！」

え？

「い、いや、ちょっと待って！　僕の言葉を誤解しているような……」「時間がない！　最初の使命として斧をなくさねば！」

メイルは意気揚々とどこかへ駆けていった。事態が嵐のように吹き荒れた後だったからか、あっという間に視界から消えた。何匹かの妖精がメイルについて一緒に姿を消すのが見えた。残された妖精たちはあっけにとられていた。わかる。正直、僕もそうだから。

少し気まずい沈黙が続いたところで、アセリンが先に口を開いた。

「ほらね。変だって言ったでしょう？」「うん。三回目だよ」

その三回では足りないほど変な子だった。 アセリンが口火を切ると、また妖精たちが僕に贈り物を差し出してきた。たちまち賑やかになり、僕は自分の過ちにまったく気づかないまま、妖精たちの波に埋もれた。

一．妖精の里（３）

「世界樹を信じましょう！　信じれば福が来ます！」「この世界樹の絵を枕元に置いて寝れば！　頭がよくなり！　髪も生えます！」

何を間違えたのかはわからないけれど、とにかく間違えたのは確かなようだ。 僕の本体の周りをぐるぐる回る妖精が増えた。ただ讃えるだけでなく、僕を信じろと宣伝までしながら。 いやなぜ？　僕はたしかに自分のことに集中して僕のことは気にするなという趣旨で話したじゃないか。もちろん讃えたいなら好きにしろとは言ったけど。僕がそう言っておいて止めるのも変だし。まあ何も反応しなければ、そのうち疲れてやめるだろう。

そういうわけで、しばらく本体に意識を置かず、アセリンと一緒に村を回っていた。アセリンは理解力がやや乏しいところはあったが、説明は上手な子だった。

「ここは芸術地区で、とくに絵を描く妖精がたくさん住んでいます。えっと、三日前か四日前に行った騒がしい地区、覚えてますか？　あそこも芸術地区のうちの音楽特化地区でした」

ぺちゃくちゃ話すアセリンの説明を聞きながら通りを眺めた。たしかに色とりどりに彩られた通りだ。妖精が生み出した文化と社会はなかなか興味深かった。妖精たち自身がここまで発展したという事実は誇らしく、けなげだった。たしかにそうなのだが……正直に言えば、少しだけがっかりだった。

目新しくなかったのだ。どこかで聞いたこと、見たことがある。「どこかで」と言うまでもない。僕の知っていることなど、自分で経験したことを除けば、すべてエリンの話を通じて間接的に知ったことばかりだ。結局、この妖精たちは僕が無意識のうちにエリンを夢見ながら、エリンから聞いた話を再現したにすぎない――そう気づいて、衝撃を受けた。それでいて気になった。もし、もう少し時間があったなら、僕の知らないまったく新しい文明が生まれていただろうか。

「僕は目覚めるのが早すぎたのかな」「え、ええっ？　それはどういう意味ですか、エルドルさま？」「いや、何でもないよ。ただの独り言だ」

首をかしげるアセリンから目をそらした。この子に僕の考えを聞かせるほど無神経ではなかった。妖精が描いた壁画を鑑賞するふりをしながら考えた。僕はエリンの空席を妖精たちに埋めてほしいのだろうか。だとしたら、完全にエリンそっくりの妖精を求めているのだろうか。それとも、エリンのように僕の知らない何かを投げかけてくれることを望んでいるのだろうか。自分が何を望んでいるのか、自分でもわからない。ただ、もう少し長く眠ってから目覚めたなら、妖精たちがその答えを出していたかもしれないという思いが、じわじわと固まっていった。

待てよ。じゃあもっと寝ればいいだけじゃないか。考えてみれば、今わざわざ起きている理由がない。そうだ。もっと寝て、それから起きればいいんだ！

「アセリン」「はい？」「これで妖精の村の案内は全部かな？」「はい。今日が最後です。私たちが作ったものは全部お見せしました！」「じゃあ、そろそろお別れだね」

僕の言葉にアセリンは、持っていた案内板をぽとりと落とすほど驚いた。そしてあたふたしながら僕

にぴたりとくっついて聞いた。

「そ、それはどういう意味ですか？」 「おまえたちがどれだけ発展したかはわかった。僕が何もしなくても、自分たちでこれだけ成長したんだ。大丈夫だと確認できたから、僕はまた眠ることにするよ」 「あ……本当ですか？　エルドルさまがお望みなら私はかまいませんけど……」

あからさまに寂しそうなアセリンを見て、小さく微笑んだ。しょんぼりした子狼みたいで、頭をなでてやろうか迷ったちょうどそのとき、妖精がひとり飛ぶような勢いで駆けてきた。

「女王さま！　女王さまあああ！！！」

魔法で走る速度を無理に上げたらしく、駆けてきた妖精はかなり疲弊していた。はあはあ息を整えてから、切羽詰まった声で言った。

「た、大変です！　記念樹……世界樹さまの周りに……！」

僕の本体に何か起きたのか？

「変な妖精の群れが集まって大騒ぎしてます！　すぐ女王さまが行かないと！　せ、世界樹さまも！」

ちょうど村をすべて回り終えたところだったし、また眠りにつこうと決めた矢先だった。本体に戻らなければならなかったので好都合だと思い、アセリンと一緒に息を切らせた妖精について行った。本体の前で騒ぐのは今に始まったことではないのだから、適当に注意すれば済むだろうと思っていた。それがどれほど甘い考えだったかは、着いた瞬間にすぐわかった。

「斧を処刑せよ！」

目を覚ましてから見た中で、最も大量の斧がそこにあった。斧は僕の根元が見えないほど山と積まれていた。斧の山の上に、僕から「神託」を受けたという妖精の姿が見えた。斧の山の周囲には、その妖精に従う大勢の妖精が群がり、ほかの妖精たちが近づけないよう揉み合いを繰り広げていた。

「何をわけのわからないこと言ってるの？　私の枝打ち用の斧をなんで処刑するのよ？」 「斧は存在そのものが罪だ！」

神託を受けた地味な身なりの妖精、メイルは、初めて会ったときとはまるで雰囲気が違っていた。斧を取り巻く妖精たちをメイルが主導しているように見えた。 僕たちを探しに来た妖精が事の経緯を説明してくれた。メイルに従う妖精たちが力ずくでほかの妖精たちの斧を奪い取ったのだという。

いったい僕の言葉をどう受け取ったのだろう。僕は斧を廃せとは言っていない。ただ僕のそばに持ってくるなと言っただけだ。それなのにあの妖精は、斧をまるごと消し去ろうとしている。 ともかく僕の発言が招いた事態だ。勝手に解釈しているにしても、メイルは僕の言葉だけは聞いてくれるのだから、僕が出るしかない。

「メイル。おかしなまねはやめなさい」 「エルドルさま！　あなたの忠実なる僕が神託を遂行いたしました！　今やあなたが下された最初の使命を成就する寸前でございますれば、どうか僕の忠誠なる心をお見届けくださいませ！」

頭がずきずきする。メイルには目の前の僕ではなく、自分の心の中に作り上げた僕が見えているらしい。メイルは自分の行動に一片の迷いもなかった。斧の山に魔法で火をつけた。自分自身がその斧の山の上に立っているにもかかわらず。 ――ボッ！

「い、今、何をしているんだ！？」

メイルの大胆な行動に仰天したが、このまま焼かれるのを見過ごすわけにはいかなかった。 離れた場所にいるメイルに向かって手を伸ばし、そのまま引き寄せた。

――ブウン！

見えざる力が燃えさかる斧の山からメイルを弾き出した。メイルは力なく引っ張られるまま、樹の根元にぶつかってぐったりと倒れた。メイルを助けるや否やアセリンがほかの妖精たちを率いて消火に取りかかった。自然の火ではなく魔法で起こされた炎は、斧の鉄をも溶かす勢いで燃え盛った。周囲に集まった妖精全員が水の魔法を使っても、火勢はなかなか収まらなかった。僕は倒れたメイルに歩み寄った。何がそんなに悔しいのか、メイルはとめどなく泣いていた。

「いったいなぜこんなことをするんだ？」 「わかりません！　あなたこそなぜ私にこんな仕打ちをなさるのですか、エルドルさま！」

込み上げるままにぶつけてくる声が、血を吐くように聞こえた。僕が創り出した妖精のはずなのに、その声が怖かった。

「僕こそ何を言っているのかわからないよ、メイル。そもそも僕の言葉を曲解したのはおまえだろう？」 「私はただ、言われたとおりにしただけじゃないですか！」 「僕が他人の斧を奪えと言ったか？　斧を燃やせと言ったか？　ほかの子たちを苦しめろと言ったか？　いったい僕がおまえに何を命じたというんだ？」 「斧を廃せとおっしゃったじゃないですか！」 「それは……はあ！　おまえは本当におかしいな、メイル」

僕の言葉に、メイルは絶望に沈んだ顔になった。そしてがっくりとうつむき、ひとり言のようにつぶやき始めた。何度かつぶやいて自ら確信を得たのか、やがて僕にも聞こえるほどに声を大きくした。

「神のいない世界なら、私がおかしいのは正しいでしょう……あなたが現れるまでは、実際に変な妖精扱いされてましたし、それが当然でした！　自分でも自分がときどきおかしいと思ってましたから！　でも、それでもよかったんです！　私にはそうやって生きることに生き甲斐があったから！　それが私の生きる理由だったから！」

最後の言葉を吐き出すころには、もう顔を上げていた。絶望に怨みが滲んだ瞳が僕に向けられた。僕はとてもあの目に返す言葉が思いつかなかった。ただ、この狂気じみた妖精が怖かった。

「……」 「でも、もう神がいると証明されたじゃないですか！　この世界を作った神さまが降臨されたんですよ！　なら神の意志に従うのが当然で、従わない妖精のほうがおかしい世界になったんですよ！　違いますか？　そのとおりでしょう？　あなたのお言葉こそが法であり、この世の掟なんでしょう！」

頭が混乱していた。創造主として扱われることは、ちょっと重荷だなという程度にしか考えていな

かった。だがその結末がこれだ。決して良いことばかりではなく、決して簡単なことでもなかった。僕の発する一言一言が、ある者にとっては天から落ちる雷のようだった。自然の摂理となり、法則のように受け止められた。

「私のしたことが間違いだというなら、そもそもなぜあんなふうにお命じになったのですか？　私を試そうとなさったのですか？　私にどうしてほしかったのですか？　どうか答えを教えてください、エルドルさま！　我らが世界樹さま！　この世界の創造主さま！」

必死で涙をこらえる声に、怒りがにじんでいた。その問いに僕が何を答えられるだろう。 何も答えられないまま、僕は悟った。

メイルの信仰は、依存の別名だった。僕が現れる前は自ら判断して善悪を区別していたのに、僕が現れたことでその壁が崩れた。自ら思考することをやめ、僕に全面的に寄りかかった。自分の行いが周囲にどう映ろうと、僕の言葉に従うことが絶対に正しかったのだから。他人の斧を燃やすのは悪いことか。悪いことだ。だが神が斧を燃やせと言ったなら？　正しいことになる。

ある妖精にとって、僕の存在はそういう意味を持つようになってしまった。すすり泣くメイルを黙って見下ろしながら、ひとつの結論に達した。僕はこの子たちにとって、未知の存在であり続けなければならない。

「メイルは追放よ！」

アセリンが怒りに満ちた声で、ほかの妖精たちとともに駆けつけた。やっとのことで火を消したらしく、みんなあちこち焦げたり顔に煤がついたりしている。消火を僕が手伝うべきだっただろうか。いや。僕が出しゃばってはいけない。

「メイルはもう村で一緒に暮らす資格なんてないわ！　メイル、あなたはおかしすぎる！」「でも、でも私は……！」

メイルは涙をいっぱいにためた目で僕を見つめた。すると僕と目が合い、はっと目を見開いた。僕がどんな目でメイルを見ていたのか、自分ではわからない。

すでに事が起きてしまった以上、僕がメイルをなだめて村と仲裁しても長くは持たないだろう。アセリンやほかの妖精たちは心の中にメイルの所業をずっと抱えて生きていくことになるし、メイルは今しがたのように自分の過ちすらまた僕に委ねようとするだろう。

「今日の夕方までに、あなたとあなたに従う子たちも全員、村から出ていって。もう一緒には暮らせない」「私が何を間違えたっていうのよ！　おかしいのはあなたたちのほうでしょ！　私は間違ってない、間違ってなんかないったら！」

やかましかった。 耳に入る騒音と同じくらい、頭の中の思案と心の中の葛藤がやかましかった。頭の中はともかく、耳に入る騒音だけは鎮める方法がある。

【しっ】

妖精たちが眠りに落ちた。つい先ほどまで感情をぶつけ合っていた者たちが、糸の切れた人形のよう

にばたりと倒れた。目の前で争っていた妖精だけではない。この森――僕の森にいるすべての妖精が、一瞬で眠りに落ちた。

僕が何をすべきか、悟った。 僕は眠った妖精たちをそれぞれの家に寝かせてやった。この子たちはこれから永遠に眠り続ける。だから安らかに眠らせてやりたかった。失敗作ではあるけれど、僕が作った子たちだ。今回の件で教訓を得た。二度と自分の子たちに正体を明かすまい。そのためには、僕の存在を知っている子が残っていてはいけない。

完全に一から始めよう。 時間を巻き戻せたらいいのだが、それは僕の力でも不可能だ。そもそも眠ろうとしていた理由も、未来を早送りするためだったのだ。

妖精たちを全員、それぞれの場所に安置し終えた。そして僕が初めて根を下ろしたこの森を離れることにした。エリンとの思い出の詰まった場所を後にするのは惜しかったが、仕方がない。僕は眠っている間にも新たな妖精を生み出してしまう。新しく生まれた妖精が永遠の眠りについた妖精を見て驚いたり、起こしたりしてはいけない。存在そのものを知らせてはならないのだ。

こうして僕は故郷を後にした。 僕の感覚でも遥か遠い土地に新たな根を下ろし、森を作った。そしてまた眠りについた。 新しい子どもたちが、新しい土地で、新しく始められるように願いながら。